

た。花壇の木陰でポーズする事にし、蚊がすごいので蚊取り線香をたき、シュミーズ一枚の坐りポーズでそれは始まった。梅原先生も一日おきぐらいいに來られた。昼飯は一緒に、戦後の食料難の時だったから、みんなは唐もろこしの粉の団子とか、芋とかの代用食だったが、先生は重箱に入った豪華な弁当だった。この時の仕事の有様は本当に印象深い。

戦争中は、外国の新しき美術の動向は全く紹介される事はなかったが、この時期、一挙にフランス、イタリー、アメリカ等の新しい作家の画集が、色刷りの本としてどん／＼入って來た。それまでは、僅かに九段下に近い井上美術書店で、モノクロのいろ／＼な画集を見ていた我々は、大変な時代がやって來つたと瞠目したものだ。そんな氣配を梅原先生はお察しになって、この者たちに近代西欧の良い作品を見せなければならぬと、伊豆に疎開してある福島コレクション（現在はブリヂストン美術館の収蔵品になっているピカソ・マチス・ルオー等の傑作）を見に連れて行く事を思いつかれた。しかし、全員を連れて行っても仕方ないと、先生は十二名の学生をお選びになり、他の人にわからない様にその十二人に告げる様にと久保先生にお命じになったのだった。選ばれた人たちは大喜びで、その秘密を守り、各自駿豆鉄道の荊山駅に集合、そして、ピカソ・マチス・ルオー等の傑作に直かに出会い、みんな興奮した。その上、先生の手配で大仁ホテルに泊したので、全く選ばれてよかったなあと、一同喜び合ったものだった。これは昭和二十二年の夏の事だったと記憶している。

それから間もなく卒業したのだったが、卒業制作は材料不足ゆ

え、自画像は出さなくてもよいという事になった。「もっと教えたいのだが、君たち、落第する方法はないものかな」（その頃の美校には、芸大における大学院にあたる研究科の制度はなかった）と、梅原先生はそんな事を仰言ったのであった。考えて見れば、我々が絵だけに集中出來たのは二十一年、二十二年の二年間のみだったのである。

⑭ 美校回想

岡田菊恵

〔本篇は女性第一回生岡田菊恵氏（旧姓川村。昭和二十六年油画科卒）に執筆して頂いたものである。〕

入学の動機

私が美校を受験しようと思ったのは、富士見高等女学校のとき的美術の先生で清水七太郎（大正六年美校西洋画科卒）という盛岡出身の方の勧めによるものだが、兄が曾宮一念の息子と立教中学の同期（二人とも戦死）だったこと、母の弟が院展に出品していたこと、祖父が円朝と並ぶ噺家で河鍋晩斎と交流があったことなど、美術に縁のある家庭に育ったことにもよる。

入学した頃

美校に入学はしたものの、キャンパス、絵の具はもちろん、木炭紙もパンもない。学校から前の生徒の描いたのを貰って、その裏に描いたが、藤島教室誰々などと書いてあるのを消して描くのだった。パンは、自宅で作れる人は蒸しパンを作って持って行ったが、それで消すと跡が残るので普通のパンのように具合よく行かな

い。絵の具は、軍の放出品が月光荘だかどこかの倉庫にあったのを皆で取りに行った覚えがある。モデルも初めの頃はいなかったが、だんだんとやって来るようになった。特に苦労したのは教室のストーブの燃料で、皆でリヤカーを引いてベルギー大使館の焼け跡へ燃やせるものを貰いに行ったことがある。教室の衝立も壊して燃やした。階段の手すりの擬宝珠のような装飾を切ろうとして、某課長に叱られたりもした。誰も彼も空腹で、みじめな生活をしていた。クラスの間には栄養失調で死んだ人もある。戦争直後のこととて、生徒の年齢も経歴もさまざまで、粗野な校風は私たち女生徒には刺激が強すぎ、そのためか、自宅で描いていてコンクールのときなどだけ登校する人も居た。在学五年の間には物資不足も少しずつ改善されては行ったが、二十六、七年はまだ厳しい状態で、三十年になつてどうやらホツとしたところだろうか。

高山夏期教室

入学した年の夏休みに、学校は希望者を集めて飛驒の高山で夏期教室を開いた。全科から合計五十名ほどが集まったが、油画科は二十名くらい居たと思う。皆ボロ靴を履いて、古い布で拵えたブラウスを着たりして参加した。引率は西田正秋、加藤顕清先生で、宿舍は神社の側の民家だった。私たちは陶器や木工はやらず、専らあちこち見物したり写生をして歩いたのだが、そんな時、宿舍の小母さんがお弁当に蓬のパンを作ってくれたりした。安房峠を越えて上高地まで遠足にかけたこともある。峠を越えるとき、加藤顕清先生が生徒のリュックを背負ってくれたのが印象的だった。

この夏期教室を実施するにあたって、荒っぽい復員生やうぶな女

生徒を一つ屋根の下で生活させて問題が起こりはしないかと、先生方は随分心配し、監督に気を遣ったらしい。生徒の外出が長引くと、西田先生が宿舍の玄関にでんと座って待ちかまえていて、小言を言ったりした。

第一回芸術祭

入学した年に第一回芸術祭が開催された。これは各科の主な上級生の方々が企画されたものらしい。仮装行列などもあり、各々が仮装して学校から都美術館の横にあった椎の木グランド場までくり出した。元気な者は山下まで行き、ヨカチンやチャカホイを踊った。女性はさすがにチャカホイはやらなかったが、女性は男装をすることなり、各々が趣向を凝らして男装の麗人になった。男子は女装して手をつなぎ踊った。食べる物もお酒も不自由な時代に、それでもある人は裸になり、ヤッデの葉を腰の廻りにつけて、顔を真っ黒に塗り踊りまくっていた。女性も負けずにおかしな格好をした記憶がある。本当に荒々しい感じだったが、それは青春の荒々しい純な感じだった。

安井先生およびクラスのこと

当時の油画科は安井教室、梅原教室の二つの教室に別れていて、各々の教室の学生の気風も異なっていた。安井教室は全体に地味な感じであつたように思う。お二人の外に伊藤藤、久保守、寺田春式の各先生方が指導に当たっておられた。碓伊之助先生は予科の時にデッサンの指導に当たられ、上級生の油絵の指導にもエネルギーに当たっておられた。マチスのお弟子だったので、デッサンはもちろん色彩にもそれは厳しい先生で、色感の悪い場合など、「彫刻

に変わった方が良いのではないか」なんて仰言った。安井先生は静かに遠くをじいっとご覧になって手を前に組んで立っておられる姿には身がすくむ思いだった。作品を批評されるときもじいっと見つめられ、時間が長かったことで有名だ。厳しく、穏やかで、時としてユーモアのある話をされ、素晴らしい先生だった。

教室では年齢に大きな差のある男女生徒がイーゼルを互いに立てて勉強した。安井先生がお出でになってご指導下さる日は朝から緊張感があった。伊藤先生がご指導下さる日もあった。七月十四日には壁に木炭でバリー祭の歌を書き、バリーを偲び歌ったものだ。個性の強い変人の寄り集まりみたいだったから、まだ女学生のようにだった私は本当に苦労した。私たちには女性の上級生がいなかったから、男性の上級生がみな厳しく見えた。それでも女性だからというので親切にして頂いたこともあったようだ。

その他のこと

実技の他に学科でも秀れた先生に指導を受けることが出来た。西洋美術史は初め児島喜久雄先生で次に吉川逸治先生だった。日本美術史は上野直昭先生。美術解剖学が西田正秋先生、予科のときのフランス語は新規矩男先生、国語は麻生磯次先生だった。

児島先生は時折り休講もあったが、そのルネッサンスの講義は素晴らしいものだった。私は後にイタリアを旅してその思いを新たにした。ウフィッツィ美術館の様子など、その名画といわれる数々の作品に対して先生は熱心に語られ、あるときはレオナルド・ダ・ヴィンチのマリアの美しい顔のさわりを黒板にさっと描かれた。そのデッサンの素晴らしさは、画家にもこんな人は少ないと思われたほ

どで、東大美学に人多しといえども、児島先生のような方は出ないのではないかと思う。大きな目をとときにはユーモアをまじえていたずらっぽくされ、ニコニコしてお話しなさる姿。ヴァチカン宮殿で見た面白い話などもなさった。

吉川先生は何時もお声が低く、スライドを使って講義をなさるのだが、午後の学科は眠くてたまらなかった。近くに動物園の孔雀の声を聴き、ウト／＼したことがある。

日本美術史の上野先生は何時も強い語調で話され、好きな奈良時代仏像になると一層に力が入った様子だった。薬師寺の薬師観音像、如来像等も特にお好きだったようだ。

西田先生は予科のときの予科長でもあったので、少し怖い存在だった。解剖学の他に美術一般の学識を折々に話され、今でも思い出すことがある。昔は生徒が東大まで実際に解剖を見に行ったとか聞いたが、私たちのときはそのようなことはなかった。西田先生も戦争で家を失い、ご不自由な生活をしておられた。昼時などに大浦食堂からどんぶり一杯のすいとん汁を手持って廊下を歩いて行かれたお姿が今も目に浮かぶ。

卒業制作

卒業するまでには卒業制作一点と一〇号くらいの自画像を期日までに提出しなければならなかった。制作の期間については忘れたが、とにかく制作の場所を探す必要があった。自画像は簡単に描けるが、制作となると大変で、私はクラスの友人小林喜巳さんと一緒に下北沢のアトリエを紹介して頂いて、お互いにモデルになって描いた。寒い頃で、火鉢に炭火を炊き、制作（五〇号くらい）をし

た。バックに何か使いたいと思っても布もなく、かつて小林さんの師であった目白の大久保作次郎先生のお宅に伺い、古い布を貸して頂いた。卒業制作展のときは、作品の成績順に並べ、教室を大きく広げて展示会場とした。

⑮ 終戦直後の写真資料について

終戦後の数年間は記録資料が少なく、学史の記述を十分になし得ないのが実情であるが、幸い写真については小松光義氏をはじめとする卒業生、あるいは関係者の方々から多数の提供があり、予想外の充実をみた。そのなかには現在エジプト写真家として著名な仁田三夫氏が撮影したものが多く含まれており、特に高山夏期研究会や第一回芸術祭、各科教室の様子などを如実に知ることができるのはそれらの良好な写真のおかげである。

仁田氏は浦和中学校卒業後、東京写真専門学校に入り、講師として教えるに行っていた西田正秋を知り啓発を受けた。西田と氏は戦争が終ったら一緒に中国の石仏の写真を撮りに行こうと計画していたという。十九年に同校を卒業したが、戦後二十一年初頭から二、三年の間、本校の西田研究室に出入りし、その間、浦和中学の先輩の岩田健氏が彫刻科在学中であったことなどにもより、本校生たちとの交流が生まれ、そのため行事の折りには氏が写真の腕を振るうことになったのである。